

用途別提案求められるWeb会議/テレビ会議

急浮上のスマートフォン対応

Web会議の性能向上でテレビ会議との棲み分けが曖昧になってきた。一方でユーザーニーズが多様化し、用途別の提案が求められる始めた。最新の製品トレンドと利用動向の変化を追った。

文 藤田 健 (本誌)

「出張コストの削減」「移動時間の節約による業務効率化」という提案で普及してきたビジュアルコミュニケーションシステム。矢野経済研究所の「国内TV会議 / Web会議システム市場に関する調査結果 2010」によると、2010年度の市場規模は合計で200億円を突破する見込みだ(図表1)。「大企業はもちろん、中堅中小企業も多くがすでに何らかのシステムを導入している」と語るメーカーもあり、これまでのように出張コストの削減を軸にした提案にとどまっ

ていては、さらなる拡販は難しくなっている。

そこで登場してきたのが、「どの層のどのような会議・打ち合わせに、どの製品・サービスが適しているのか」という、利用シーンやワークスタイル、期待する効果によって商材を分けて提案する方法だ。

ここでは、新たな提案手法のヒントになるよう、最新のビジュアルコミュニケーションシステムのトレンドと、ユーザーの利用動向の変化をレポートする。

Web会議は運用コストで選択

まず、ビジュアルコミュニケーションシステムの基本を押さえておこう。

ビジュアルコミュニケーションシステムは、専用端末を利用するテレビ会議システムと、PCでの利用が中心のWeb会議システムに大別される。

テレビ会議システムは、ポリコム、ソニー、シスコシステムズ(旧タンバーク)、ライフサイズ・コミュニケーションズが国内シェアの上位を占めている。また、映像技術の優位性を生かし、パナソニック システムソリューションズ ジャパン、日立製作所、NECといった国内メーカーも参入している。さらに、後述する最新の映像圧縮技術「H.264/SVC」を世界で最初に採用した米Vidyo(ヴィデオ)も注目され始めている。

Web会議システムは、SI型とASP/SaaS型に分類される。SI型は、サーバーインストール型とも呼ばれ、サーバー機器やサーバーライセンス、サーバーへのソフトウェアインストールも含め、ライセンスパッケージで提供され、自社内でユーザーが運用する。ASP/SaaS型は、インターネット経由でWeb会議システムを利用するもので、簡単・手軽に始められる。ASP/SaaS型にはバーチャル会議室単位で契約する「ルーム型」とユーザー数で契約する「ID型」がある。



ジャパンメディアシステムの「LiveOn」はテレビ会議システムの領域に入り込んでいる。Ver8.0でHD対応も実現した



エイネットの「Fresh Voice」はHD化と「H.264/SVC」の採用で安定した高画質を実現。最大9人の同時表示が可能

SI型とASP/SaaS型の選択のポイントは、ランニングコストだろう。ASP/SaaS型は、1ライセンス当たりは安価だが、ライセンス数が多くなれば割高になる。また、長期にわたって利用する場合も、SI型のほうが安価になるケースがある。さらにSI型は、手厚いサポートも受けられるという利点もあるので、これらの条件を加味したうえで、ユーザーの意向も交えて提案をする必要がある。

Web会議システムの主要ベンダーは、ブイキューブ、NTTアイティ、OKI、エイネット、ジャパンメディアシステム(JMS)、「WebEx」を扱うシスコシステムズなどだ。提供形態は、ブイキューブ、NTTアイティ、JMSがSI型とASP/SaaS型の両方で提供、OKIとエイネットはSI型のみ(OKIは子会社がASP型で提供)、シスコシステムズはASP/SaaS型のみとなっている。

Web会議がテレビ会議の領域へ

ビジュアルコミュニケーションシステムの最近のトレンドをみてみよう。

まず、「HD(ハイビジョン)対応になったことが一番大きい」と各社とも口を揃える。これまでのSD(標準)画質では、資料共有などの時に解像度

が足りないという不満がユーザーから出ていたが、HDになってからはそのような声は出なくなったという。HDについては、専用機メーカーの製品は「HD対応機しかなくなった」と言っても過言でないほど、定着してきている。

一方、Web会議システムもNTTアイティの「MeetingPlaza」、エイネットの「Fresh Voice」、JMSの「LiveOn」、OKIの「Visual Nexus」と、続々とHD対応を実現している。現在はWebカメラも安価なHD対応製品が登場してきていることもあり、全社がHD対応を実現するのは時間の問題だろう。

Web会議システムがHD化するメリットは、ユーザーニーズへの対応以外もある。テレビ会議システムの領域にまで入り込むことができることだ。すでに、JMSの富樫泰章社長が「専用機のリプレースとしての採用が多い」、エイネットの西畑博功社長が「専用機のシステムを拡充する時に導入されるケースがほとんど」と語るように、テレビ会議に匹敵する性能を有し、実績を積んでいるWeb会議システムもあるが、HD化に対応することで、よりビジネスチャンスが広がる。

なお、テレビ会議システムとのハイブリッド構成については、テレビ会議の標準規格であるH.323に対応したMCU(多地点接続装置)やゲートウェイを利用する。また、「V-CUBE」のように、連携を実現しているASPサービスもある。

回線に左右されない圧縮技術

テレビ会議販売のマルチベンダーであるVTVジャパンの栢野正典社長によれば、特にテレビ会議メーカーを中心に「高精細映像の追求とともに、不安定なネットワーク環境でも安定した映像・音声品質で会議を実現する取り組みが進んでいる」という。安価なWeb会議システムの性能向上で、テレビ会議システムとの境目がなくなりつつあることで、専用機の良さを訴求するために、より品質を追い求める傾向になっているようだ。システムでHD化を実現しても、ネットワークの状態に左右されるようではあまり意味がない。

ポリコムジャパンは昨年、業界で初めて「H.264 ハイプロファイル」を採用したHD対応の「Polycom HDXシリーズ」を市場投入した。

H.264 ハイプロファイルは、高品質

図表1 テレビ会議 / Web会議システムの国内市場推移

